

平成 21 年 5 月 20 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19520713
 研究課題名（和文） フランス・アルザス地方における徴兵制廃止に伴う
 若者文化の変容研究
 研究課題名（英文） Transformation of Youth Culture due to the Abolition of Draft
 System in Alsace, France
 研究代表者
 蔵持 不三也（KURAMOCHI, Fumiya）
 早稲田大学・人間科学学術院・教授
 研究者番号：40195540

研究成果の概要：

本研究はアルザス地方の若者文化が 2001 年の徴兵制の廃止に伴ってどのように変化をしたかを、2 度の現地調査と文献渉猟を通して追究したものである。具体的には、徴兵対象者が伝統的に行ってきた夏至の「聖ヨハネの火祭り」と若者集団の文化活動の変容を対象として調査・検討し、これらの活動が、1996・1997 年度の調査時と較べて劇的に衰退し、さらにアルザス語への理解と関心も著しく弱体化していることが明確となった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：文化人類学

科研費の分科・細目：3301

キーワード：民族学、若者文化、祝祭、徴兵制、アルザス地方、アルザス語

1. 研究開始当初の背景

（1）研究代表者は 30 年来アルザス地方の民俗文化を調査しており、その一連の調査・研究のなかで、「コンスクリ」と呼ばれる徴兵年齢の若者たちが、地域社会における重要な文化的役割を担っていることに注目してきた。とりわけ、毎年夏至に、アルザス地方を代表する植生である樅の枝・葉とブドウの蔓葉を用いて巨大な火塚を築き、これを燃やすという祝祭「聖ヨハネの火祭り」は、彼らが同世代の娘たちとともに組織する年齢階梯結社「クラス」の最初のパフォーマンス

としてある。彼らはこの火祭りを主体的に執り行うことで、国家的な通過儀礼（徴兵）と、地域的な通過儀礼（火祭り）という、二重の社会化を体現している。

だが、この徴兵制は 2001 年に廃止され、兵役はすべて志願兵ないし職業兵にとって代わられるようになった。こうした国家的制度の変更により、かつてその制度の対象だった彼ら若者たちの文化がどのように変容したか。同時に、学校教育の場はもとより、日常的なアルザス語離れが囁かれている今日、彼らが実際にどの程度地域言語を用いてい

るかも、かねてより研究代表者の関心対象となっていた。もとより、言語とは帰属意識と不可分の関係にある。だとすれば、アルザス語離れという現象が、彼ら若者たちの郷土意識の希薄化を招いているのかどうか。

幸い、研究代表者は、前述したように、これまでの長きにわたる調査から、アルザス各地の民俗文化や言語文化に関するかなりのデータを収集してきた。そうした「過去」と「現在」を比較できる立場にいる。本研究の題名にある「変容」とは、まさにこのようなデータと比較できることを念頭に置いた者である。以上が、研究開始当初の背景である。

(2) なお、今回の調査地スルツバック＝レ＝バン村もすでに過去2度、1996年と1997年に、本学人間科学研究科の文化生態学ゼミ生とともに民俗調査を実施し(その成果は1998年の「人間科学研究」誌に発表済み)、村長以下、少なからぬ村人たちと良好な人間関係を構築してきた。今回、ここを調査対象に選んだのは、そうした関係によってさまざまな便宜が図ってもらえるためであり、実際に期待以上の支援を受けることができた。

とりわけ、前回・前々回の調査でいるいる面倒をみてくれた当時の村会議員、現民宿経営者の知人は、かつて「コンスクリ」と呼ばれていた徴兵該当の若者たちを紹介してくれ、彼らの考え方や生活ぶりをつぶさに知ることができた。

2. 研究の目的

(1) 以上のことから、本研究では「コンスクリ」(conscrites)と呼ばれる若者たちを中心として、徴兵制廃止後の彼らが、現在どのような文化的役割を担いかつ演じているかを研究・調査の目的とした。彼らコンスクリたちの祭りはどう変容したのか。若者文化や「クラス」の連帯意識は、そして彼らと地域社会との関係はどうなっているのか。本研究は現地調査と文献資料研究、および過去の調査データとによってそれを明らかにしようとするものである。

そのための具体的な調査対象として、本研究では以下の項目を取り上げた。

(2) 具体的な調査対象

徴兵該当者を指す「コンスクリ」の呼称の存否：消滅したとすれば、それに代わる若者呼称

火祭りの現在と変容：若者たちの参加形態、火祭りの構成要素(暦日、場所、参加者、準備作業、村当局・村人たちの介在、マイヤと呼ばれる樞柱建立、松明、火塚の形状と火入れ、アルザス語によるコンスクリ・ソングなど)

コンスクリット(conscrites コンスクリと同年代の娘)たちによる、バラ帽子(コンスクリが火塚の上を跳び越す際にかぶる帽子で、麦藁帽にバラの花をくくりつけたもの)作りの現在と変容(参加者、材料調達、デザインなど)

年齢階梯結社「クラス」の存否：存続しているとすれば、その役割・性格の変容、消滅したとすれば、それに代わる結社の特徴

若者たちによる文化的・社会的活動の変容：文化サークル(音楽サークルなど)やスポーツ・クラブ、慈善活動などの過去と現在、新たな「遊び」(コンピュータ・ゲームなど)の特徴、村落横断的な若者行事の存否

アルザス語の現状：若者たちの習得契機、理解度、使用頻度など

3. 研究の方法

(1) 現地調査

当該若者たちや一般村人たちへのインタビュー

旧コンスクリたちへのインタビュー：とくに、現在のコンスクリたちや火祭りをどう思うかについて

火祭りの参与観察(VTR、カメラ撮影を含む)

関連資料の収集と分析：村発行の機関誌、地元紙記事、統計資料、写真など

アルザス民俗研究者からの意見収集

(2) 国内研究

収集資料の分析

ヨーロッパ民族学者からの意見収集

4. 研究成果

以上の調査・研究から、調査地スルツバック＝レ＝バンでは、少なくとも徴兵制廃止以降、若者文化全体に著しい衰退現象が起きているということが確認された。以下はその内容を前回・前々回の調査(Aと記す)と比較したものである。

(1) 呼称

「コンスクリ」(および「コンスクリット」)呼称：消滅。一般呼称「ジューン」(jeunes)へ

(2) 火祭り

暦日：6月最終土曜日(変化なし)

火塚の場所：村有地の丘(A)から私有地へ

火塚の材料：コンスクリたちの調達(A)から村役場・村人による調達へ

マイヤ：消滅

松明：マイヤでの点火(A)から会場奥での点火へ

火塚形状：大型・円筒形・端麗（A）から小型・焚き火状・粗雑へ

火塚火入れ：コンスクリ（A）から消防団員（旧コンスクリ）へ

コンスクリ・ソング：消滅

バラ帽子：コンスクリットたちによる赤いバラの花の一部儀礼的窃盗（A）からすべて購入へ。白バラも混入

（3）「クラス」

小旅行などの集団的活動（A）から形式的存続へ（実的活動は火祭りのみ）

生涯的連帯意識：明確・明示的意識化（A）から希薄化へ

（4）若者たちの文化的・社会的活動

文化サークル（音楽サークルなど）やスポーツ・クラブ：8グループ（A）から消滅へ（進学、ゲーム・ソフトの普及による 村長談）

他村との交流：クリスマスや復活祭などの催し物（A）からロック・コンサートのみへ
慈善活動：村内清掃など（A）から衰退へ（教会内でのクリスマスの人形飾りのみ）

（5）若者たちのアルザス語

コンスクリ・ソングの合唱（A）から消滅へ

家庭内・友人間でのアルザス語会話：衰退
アルザス語習得者：コンスクリ数人（A）から皆無へ

（6）考察

文化の変容とは、テキスト（text）の脱テキスト化（detextualization）- テキスト化（entextualization）としてある。これは、しかじかの文化を構成する現象なり事物なりが、当事者 ときには観察・調査者によって、意図するとしないとにかかわらず、アプロプリエーション（appropriation）をこうむるプロセスを指すが、おそらくスルツバック＝レ＝バンの火祭りもまた、こうしたプロセスと無縁ではありえない。

すなわち、前回・前々回の調査で目の当たりにした火祭りのありよう（テキストA）は、それ以前のテキストを脱テキスト化したものであり、これが新たなテキストとして（再）解釈（＝変容）されていく。だとすれば、徴兵制の廃止を経て、2008年の火祭りも、それ以前のテキストを脱テキスト化したものであり、2009年にはまさにこれがテキストとして新たな解釈のプロセスをこうむることになる。すっかり人口に膾炙している「伝統の創造」とは、まさにこのメカニズムの謂いにほかならない。

こうしたメカニズムからするかぎり、とりわけ村の古老や旧コンスクリたちがしばしば口にする言説、すなわち「祭りが小ぶりに

なった」とか「様変わりした」という、言外に否定的な意味を宿した言説は、じつはさほどの説得性をもちえない。前述したように、変容しない文化はなく、祭りの縮小化を嘆く言説には、「今」（＝現実）を否定ないし批判することで、必然的に自らが当事者だった「昔」（＝記憶）を称揚し、併せて自分自身をも称揚しようとする、いわば無意識の意図ないし「アイデンティティの企み」が働いているからである。だが、スルツバック＝レ＝バンの火祭りでは、主体者たる若者たちに、そんな嘆きや不満として表出される古老や旧コンスクリたちのイマジネーション（個人的想像力）を凌駕しうる、彼ら固有のイマジネーションを見出すことはできない。こういってよければ、それは火祭りを演出してきたイマジネール（社会的想像力）を縮小させるだけのものとなっているのだ。

それにしても、ここまで衰退したにもかかわらず、なおも火祭りを営むのはなぜなのか。この疑問に答えるのは比較的容易である。火祭りに通過儀礼的な性格をみるのはすでに難しくなっているとはいえ、スルツバック＝レ＝バンの文化の生態系（エコ＝カルチャー）において、火祭りの消滅は単なる行事の消滅にはとどまらない。それは火祭りが現出するもろもろの文化的要素の消滅ないし衰退を招く。

研究代表者はこうした文化の特徴を「文化の規制力」と呼ぶが、ジューンたちは、いや村全体がまさにこの規制力を受けているのではないか。そう考えたとき、じつはここに大きな問題が待ち受ける。若者たちのアルザス語離れである。前述した消防友の会によるアルザス語の芝居公演や、TVのアルザス語ニュース番組など、ジューンたちがアルザス語を耳にする機会はなくはない。だが、村唯一の小学校にアルザス語教育のカリキュラムはない。

もとよりこうした傾向はスルツバック＝レ＝バンにかぎったことではない。詳細は他日を期すとして、2008年にオー＝ラン県議会が発表した「数値で見るアルザス」によれば、フランス語と、アルザス語が言語的に属し、したがってアルザス語の習得を容易にするドイツ語を教える、公立と私立のバイリンガル・クラスを設けている小学校に通う児童は、アルザス全体でそれぞれ6301名と924名、中等学校では793名と184名しかおらず、リセでは公立のみで321名が履修しているだけだという。その代替装置ともいべき家庭でも、かつて一般的だった親子間のアルザス語による会話は激減しているという（一部インフォーマントによる）。この言語の衰退が、将来アルザスの文化的生態系にはたして何をもたらすか、今はまだ即断を控えなければならぬが、火祭りや文化的・社会的活動を

通して窺える若者文化の変容の重要性は、まさにここにこそあるといえるだろう。
むろん、こうした状況がはたして徴兵制の廃止と直接結びつくものかどうか、またアルザス地方全域で共通するものかどうか、即断はできない。だが、この廃止とともに若者結社（クラス）の連帯や郷土への帰属意識が緩んだことは間違いなく、そこには国家的制度と年齢階梯およびその文化との密接な関係をみてとることができる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

蔵持不三也：報告書「フランス・アルザス地方における徴兵制廃止に伴う若者文化の変容研究」（印刷中、言叢社）

〔学会発表〕（計1件）

Fumiya KURAMOCHI：「アルザスの火祭りについて」（Sur la fête des feux en Alsace）、EURETHNO、2008年09月15日、モンペリエ大学

〔その他〕

前記知人の紹介で、地元紙 L ALSACE の記者から調査の内容などに関するインタビューを受け、2008年6月24日の同紙に研究代表者の記事が写真入りで大きく取り上げられた。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

蔵持 不三也（KURAMOCHI FUMIYA）
早稲田大学・人間科学学術院・教授
研究者番号：40195540

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし